

令和5年度

病害虫発生予察情報 第17号

9月予報

北海道病害虫防除所 令和5年(2023年)8月25日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

季節予報(付記)によれば、9月の天気は、数日の周期で変わり、気温は平年より高い確率が50%です。降水量は平年より少ないまたは多い確率がともに30%、平年並の確率が40%です。

これまでの発生状況と季節予報から、多めの発生が予想される病害虫は、水稻のいもち病(穂いもち)、ウンカ類、アカヒゲホソミドリカスミカメ、とうもろこしのオオタバコガ、てんさいの褐斑病、あぶらな科野菜の軟腐病、モンシロチョウ、りんごの斑点落葉病、モモシクイガです。

なお、防除対策の詳細を紹介した「北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」は北海道病害虫防除所のホームページ(<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>)で公開しています。

9月に注意すべき病害虫

作物名	病害虫名	発生予想		注意事項及び防除対策
		発生期	発生量	
水稻	いもち病 (穂いもち)	既発 (早)	多	籾殻やわらは翌年の伝染源となるので、ハウスや水田周辺に放置せずに適正に処分する。発生田では特に留意する。
てんさい	褐斑病	—	多	8月で防除を終了すると9月に多発することがあるので、引き続き防除を継続する。薬剤の選択には特に注意する。散布間隔が開きすぎないように注意する。
りんご	黒星病	—	やや少	散布間隔が開きすぎないように注意し、引き続き防除を継続する。薬剤の選択に注意する。り病葉やり病果は翌年の伝染源となるため、適切に処分する。

A. 水稻

<7月13日付け注意報第3号発表>

いもち病(穂いもち) 発生期:既発(早) 発生量:多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) いもち病は弱い雨が長期間続いたり、寡照によって水稻の抵抗力が低下すると多発しやすい。発病適温は20~25℃であり、最低気温16℃以上で発病の危険がある。穂いもちは葉いもちの病斑が伝染源となることから、葉いもちが多いと多発しやすい。
- (2) 予察田の「きらら397」における葉いもちの発病度は、8月4半旬時点で、岩見沢市では38.0(平年:17.7)、比布町では72.0(平年:32.1)、と平年より高く、北斗市では28.0(平年:20.5)と平年よりやや高かった。
- (3) 8月3半旬の巡回調査では、発生は認められていない
- (4) 予察田の「きらら397」における穂いもちの初発期は、岩見沢市で7月31日(平年:8月12日)、比布町で7月31日(平年:8月5日)、北斗市で7月28日(平年:8月8日)と平年より早かった。8月4半旬時点の発生量はいずれの地点においても平年より多く、節いもちの発生も平年より多く推移している。
- (5) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、穂いもちの発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 穀殻やわらは翌年の伝染源となるので、ハウスや水田周辺に放置せずに適正に処分する。発生田では特に留意する。

ウンカ類	発生量：多
------	-------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ヒメトビウンカ及びセジロウンカは高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による8月のヒメトビウンカの誘殺数は、長沼町で平年より多く、北斗市で平年よりやや多く、比布町では平年より少なく推移している。セジロウンカは、長沼町で平年より多く、北斗市で平年よりやや多く、比布町で平年並に推移している。
- (3) 予察田すくい取りにおけるヒメトビウンカ成虫捕獲頭数は、長沼町で平年より多く、北斗市で平年よりやや多く、比布町では平年並に推移している。セジロウンカは、比布町で平年より多く、長沼町で平年よりやや多く、北斗市では平年並に推移している。
- (4) 予察田におけるウンカ類幼虫のすくい取り捕獲数は、長沼町及び北斗市で平年よりやや多く、比布町で平年より少なく推移している。
- (5) 一般田の巡回調査では、8月3半旬の水田内すくい取り調査において、全73地点のうち防除が必要な密度(20回振り捕獲頭数で成虫：1,800頭、または幼虫：900頭)に達している地点は認められなかった。
- (6) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (7) 以上のことから、ウンカ類の発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 水田内20回振りすくい取りで成虫1,800頭(幼虫900頭)以上になると吸汁害が発生する恐れがある。この程度の高密度になる見込みがなければ防除は不要である。

アカヒゲホソミドリカスミカメ(第3回)	発生量：やや多
---------------------	---------

< 8月9日付け注意報第5号発表 >

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察灯による8月の成虫誘殺数は、長沼町及び北斗市で平年よりやや多く、比布町で平年よりやや少なく推移している。
- (3) 予察田におけるすくい取りによる成虫及び幼虫捕獲数は、長沼町で平年より多く、比布町及び北斗市では平年並に推移している。
- (4) 一般田の巡回調査では、8月3半旬の水田内20回振りすくい取りにおいて、全73地点のうち空知、石狩、檜山、上川及び留萌地方の9地点で捕獲が認められた。
- (5) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (6) 以上のことから、第3回成虫の発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して適切に対応する。
- (2) 発生モニタリングによる追加散布の基準となる水田内20回振りすくい取り捕獲数は「きたくりん」及び「吟風」：3頭、「きらら397」及び「ゆめぴりか」：2頭、「ななつぼし」：1頭である。
- (3) 加害期間は水稻の黄熟期までであり、その後の防除は不要である。

秋まき小麦を適期には種しましょう

秋まき小麦を適期には種することは、病害対策として重要です。縞萎縮病及び萎縮病は、早まきすると発生しやすくなります。また、なまぐさ黒穂病は遅まきで発生が多くなります。

縞萎縮病及び萎縮病は、土壌中にいる *Polymyxa graminis* (ポリミキサ グラミニス) が伝搬するウイルス病です。ポリミキサは秋に小麦の根に寄生するため、ウイルスもこの時期に感染します。早まきするとウイルスに感染する期間が長くなるため、発病が多くなります。

なまぐさ黒穂病は、土壌表面にある厚膜胞子が発芽し、主に積雪下で小麦に感染します。小麦が小さいと感染しやすいため、遅まきすると発生が多くなります。また本病は浅まきで発生が多くなりますので、適正な播種深度で播種することも重要です。

は種適期は地域によって異なります。は種適期については北海道の営農技術対策「9月の営農技術対策」（8月25日発表予定）等を参考にしてください。

<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ns/gjf/gijyutu/index.html>

B. とうもろこし

オオタバコガ 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 本種は道外から成虫が飛来し、幼虫がとうもろこし雌穂に食入し子実を食害する。
- (2) 予察ほにおけるフェロモントラップの誘殺数は、比布町、北斗市及び訓子府町で平年よりやや多く、長沼町で平年よりやや少なく推移している。芽室町では誘殺が認められていない。
- (3) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 生食用とうもろこしでは、絹糸抽出揃い以降、1～2回薬剤防除を実施する。
- (2) 防除にあたっては他害虫の発生に注意し効率的な防除に努め、同一系統の薬剤の連用を避ける。フルベンジアミド剤、エマメクチン安息香酸塩剤、レピメクチン剤及びクロラントラニリプロール剤は室内試験で効果が高いことが確認されている。

C. てんさい

褐斑病 発生量：多

<7月21日付け注意報第4号発表>

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 褐斑病菌の分生子の形成温度は17～29℃（最適温度は24～25℃）、湿度は85%以上が必要とされており、高温多湿な条件で本病が発生拡大する。本病の潜伏期間は30℃で約7日、15℃で約20日であり、若葉に比べ老葉で期間が短くなる。
- (2) 予察ほにおける8月4半旬の抵抗性“弱”品種「あまいぶき」の発病度は、長沼町では74.8（平年：38.4）、芽室町では75.6（平年：26.8）、訓子府町の抵抗性“やや強”品種「ライエン」では64.0（平年：22.6）といずれも平年より高かった。
- (3) 8月3半旬の巡回調査では、全道各地で発生が認められており、調査全72地点中、発病株率50%を超える圃場が上川、オホーツク、十勝地方の合計27地点で認められている。
- (4) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、褐斑病の発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 8月で防除を打ち切ると9月に多発することがあるため注意する。
- (2) 散布間隔は14日以下とし、高温多湿条件となった場合は散布間隔を10日以下にする。
- (3) DMI剤（ジフェノコナゾール、テブコナゾール、フェンブコナゾール、テトラコナゾール）及びカスガマイシン剤耐性菌が全道各地で発生しているため、混合剤も含めこれら系統薬剤の使用回数を可能な限り低減する。
- (4) QoI剤耐性菌の発生が広範囲に確認されているため、褐斑病に対する防除薬剤として、QoI剤（アゾキシストロビン、クレソキシムメチル、トリフロキシストロビン）は使用しない。なお、根腐病及び葉腐病に対するQoI剤の使用回数は、登録の範囲内とする。
- (5) チオファネートメチル剤に対する耐性菌が全道で発生しているので、薬剤の選択に注意する。
- (6) 本病に特に罹病しやすい品種が栽培されている地域では本病の発生推移に注意する。

ヨトウガ（第2回）	発生期：既発（やや早）	発生量：やや少
------------------	--------------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 第1回幼虫による被害程度は、芽室町で平年並、長沼町及び訓子府町で平年より低く推移した。
- (2) 予察灯による第2回成虫初誘殺期は、芽室町で平年よりやや早く、長沼町で平年並であった。比布町、北斗市、訓子府町では誘殺は認められていない。
- (3) 予察ほのてんさいにおける第2回産卵初発期は、長沼町で7月6半旬（平年：8月2半旬）と平年より早く、訓子府町では8月2半旬（平年：8月3半旬）と平年よりやや早かった。芽室町（平年：8月2半旬）では産卵が認められていない。卵塊数は、訓子府町で平年並、長沼町では平年よりやや少なく推移している。
- (4) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠し、薬剤散布を実施する。
- (2) 被害株率が50%に達したときを散布時期の目安とする。ただし、幼虫に対する薬剤の効果は、齢が進むにつれて低下するので、散布適期を逸さないよう注意する。
- (3) 上記の防除の2週間後以降も被害が進展するときは、追加散布を検討する。
- (4) 産卵期にベンゾイル尿素剤を使用することにより、高い防除効果が得られる。

D. あぶらな科野菜

軟腐病	発生量：やや多
------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 軟腐病は高温多雨及び多窒素栽培で多発する。
- (2) 8月20日までの天候経過では気温は全道的に平年を上回り、降水量が平年を上回った地域も多かった。
- (3) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 多窒素栽培を避ける。
- (2) 防除ガイドに準拠して薬剤の予防散布を行う。
- (3) 耐性菌の出現を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。また、オキシリニック酸剤の低感受性菌が出現している地域があるので注意する。

モンシロチョウ	発生量：やや多
----------------	----------------

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察ほのキャベツにおける8月の幼虫の発生量は、長沼町及び北斗市いずれも平年並に推移している。
- (2) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (3) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 成虫の飛来が目立ち産卵の多いほ場では、防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。

- (2) 防除にあたっては他の害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

コナガ 発生量：並

＜5月15日付け注意報第1号発表＞

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) フェロモントラップによる8月の誘殺数は、比布町で平年よりやや多く、芽室町及び訓子府町で平年並、長沼町及び北斗市で平年より少なく推移している。
- (2) 予察ほのキャベツにおける8月の幼虫の発生量は、長沼町及び北斗市で平年よりやや少なく推移している。
- (3) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 薬剤抵抗性の発達した害虫であり、近年道内においてもジアミド系薬剤に対する抵抗性遺伝子の保持個体が確認されている。そのため、防除を行う際は以下の点に留意する。
 - ①同一系統薬剤の連用は避ける。
 - ②セル苗灌注処理をおこなった場合は、ほ場での防除効果の確認に努める。
 - ③防除効果が低いと判断された場合は、早めに他系統薬剤による茎葉散布を実施する。
 - ④ ジアミド系薬剤感受性低下を予防するため、本システムを含む薬剤を8月に使用した場合は道東地域で30日、その他の地域では25日、9月の場合は道南地域で30日、道央及び道北地域では45日は本システムの薬剤を使用しない。（「ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したキャベツにおけるコナガの防除対策」（令和5年指導参考事項）を参照。）
- (2) 防除にあたっては、他害虫の発生も考慮して、効率的な防除に努める。

ヨトウガ（第2回） 発生期：既発（やや早） 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) あぶらな科野菜における発生量は平年並と予想される（てんさいの項を参照）。

2. 防除対策

- (1) 防除にあたっては他の害虫の発生も考慮して、効率的な防除体系を組み立てる。

E. りんご

黒星病 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 黒星病は平均気温15～20℃で多湿条件が続くと多発する。
- (2) 長沼町の予察園（無防除）での発生量は、7月は「相伝ふじ（早生ふじ系）」で平年より少なく推移した。余市町の予察園（慣行防除）では発生が認められていない。
- (3) 8月3半旬の巡回調査では、渡島地方で発生が認められた。
- (4) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 9月以降も散布間隔が開きすぎないように防除を継続する。
- (2) 特に葉に発病が認められている場合は、果実への感染を防ぐため、十分量の薬液を丁寧に散布する。
- (3) 散布水量が不足した場合や、防除機の切り返し地点で発生した事例が認められたことから、薬剤散布は十分な水量で散布ムラのないよう丁寧に実施する。
- (4) チオファネートメチル剤、QoI剤及びDMI剤耐性菌の発生が全道で広く認められていることから、薬剤の選択に注意するとともに、これらの薬剤以外においても同一系統薬剤の連用は避ける。
- (5) り病葉やり病果は翌年の伝染源となるため、適切に処分する。

斑点落葉病 発生量：やや多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 斑点落葉病は高温多湿で多発し、特に2～3日の連続した降雨で急増する。
- (2) 長沼町の予察園（無防除）の感受性品種「王林」における発生量は、平年並で推移している。
- (3) 一般園における8月3半旬の巡回調査では、感受性の「レッドゴールド」やデリシャス系品種を調査対象としている渡島及び留萌地方で発生が認められたほか、「つがる」を調査対象としている胆振地方でも発生が認められた。
- (4) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して、黒星病との効率的な防除で対応し、薬剤散布を継続する。
- (2) 「王林」、「レッドゴールド」、「スターキングデリシャス」等の感受性品種を栽培している場合には発生に注意する。

モモシンクイガ 発生量：多

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園のフェロモントラップにおける誘殺数は、長沼町（無防除）で平年より多く、余市町A及びB（慣行防除）で平年並に推移している。
- (2) 長沼町の予察園における産卵数は平年より多く、被害果率は平年より高く推移している。
- (3) 一般園のフェロモントラップにおける誘殺数は、旭川市及び増毛町で平年より多く、岩見沢市で平年よりやや多く、札幌市及び壮瞥町で平年並、七飯町で平年より少なく推移している。
- (4) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年より多いと予想される。

2. 防除対策

- (1) フェロモントラップ等で発生消長を把握し、必要に応じて薬剤散布を継続する。

ハダニ類 発生量：並

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) ハダニ類は高温少雨条件が続くと密度が高まりやすい。
- (2) 予察園における8月のリンゴハダニの発生は、余市町A（慣行防除）で平年より多かった。長沼町（無防除）及び余市町B（慣行防除）では発生が確認されていない。ナミハダニの発生量は、余市町Bで平年並に推移している。長沼町及び余市町Aではナミハダニの発生は認められていない。
- (3) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (4) 以上のことから、発生量は平年並と予想される。

2. 防除対策

- (1) 同一系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が急速に発達するので、防除ガイドに準拠して適正な防除を実施する。

キンモンホソガ 発生量：やや少

1. 発生経過と予報の根拠

- (1) 予察園におけるフェロモントラップ誘殺数は、長沼町（無防除）で平年よりやや多く、余市町A及びB（慣行防除）で平年より少なく推移している。
- (2) 予察園における幼虫被害は長沼町で平年より多く推移している。
- (3) 一般園のフェロモントラップにおける誘殺数は、増毛町で平年よりやや多く、石狩市及び壮瞥町で平年よりやや少なく、岩見沢市、札幌市、七飯町及び旭川市で平年より少なく推移している。
- (4) 9月の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。
- (5) 以上のことから、発生量は平年よりやや少ないと予想される。

2. 防除対策

- (1) 防除ガイドに準拠して薬剤散布を実施する。

付 記

北海道地方 3か月予報
(9月から11月までの天候見通し)

令和5年8月22日
札幌管区气象台 発表

<予想される向こう3か月の天候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

この期間の平均気温は、平年並または平年より高い確率はともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年より高い確率50%です。

10月 北海道日本海側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。北海道オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または平年より高い確率はともに40%です。

11月 北海道日本海側・オホーツク海側では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。北海道太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>

<<気温>>
[北海道地方]

3か月	20	40	40
9月	20	30	50
10月	20	40	40
11月	30	30	40

低い 平年並 高い

<<降水量>>
[北海道地方]

3か月	30	40	30
9月	30	40	30
10月	30	40	30
11月	30	40	30

少ない 平年並 多い

令和5年

6月1日～8月31日は**農薬危害防止運動**実施期間です！

北海道では、農薬の使用に伴う事故・被害を防止するため、農薬を使用する機会が増える6月から8月を期間として、農薬の安全かつ適正な使用や保管管理等を推進する「**農薬危害防止運動**」を実施します。

守ろう農薬ラベル 確かめよう周囲の状況

- ラベルの確認
適用病害虫と使用方法
作物名 適用病害虫名 希釈倍率
トマト ミニトマト コナジラミ類 2000～3000倍
- 周辺への配慮
農薬散布のお知らせ
〇〇〇〇日 〇時～〇時
場所〇〇〇 目的〇〇〇
農薬名〇〇〇 剤形〇〇〇
- 飛散の防止
- 帳簿に記録
1. 使用年月日
2. 使用場所
3. 農作物名
4. 農薬の種類・名称
5. 使用量・希釈倍率
- 土壌くん蒸剤は必ず被覆
くん蒸中 立入禁止
- 施錠して保管
農薬保管庫
- 移し替え厳禁

https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/ 農薬の適正使用 農林水産省 検索

詳しくはこちら

令和5年度農薬危害防止運動 農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催

★ 農薬情報の掲載サイト

農薬の登録情報や農薬取締法などについては、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」をご覧ください。

URL <https://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

北海道農政部生産振興局技術普及課
(TEL 011-231-4111 (内線)27-838)
北海道病害虫防除所
(TEL 0123-89-2080)
各総合振興局・振興局農務課